

2009年度2学期木曜1時限「認識するとはどういうことか？」

第13回講義（2010年1月7日）

Was bisher geschah

前回は、自己にかんする知のうち次の二つを検討しました。

- 1、自我の存在の知
- 2、経験的についての一人称報告

1、自我の存在についての知「私は存在する」が、直観にもとづくのならば、それは独断論の一種になってしまうことを述べました。次に、それが、討議論理学の主張するように超越論的語用論的前提であるために疑うことが出来ないのだとすると、それは可謬的であると述べました。なぜなら、何が発話の語用論的な前提であるかは、経験的な知識であり、可謬的だからです。

2、経験についての一人称報告については、例えば「ここは赤く見える」「歯が痛い」などの経験についての一人称報告には、セラーズの「所与の神話」批判が当てはまることを説明しました。

§10 自己についての知（その2）

本日は、まず最初に前回説明し切れなかったウィトゲンシュタインの議論を紹介します。前回の講義ノートの一部と重複しています。

2、経験的意識（例えば感覚）の知

意識体験の一人称報告は、訂正不可能で、誤りえない知である。

例えば、「黄色が見えている」「歯が痛い」など。

(1) ウィトゲンシュタインによる反論

(Ludwig Wittgenstein 1889-1951 ウィーン出身の哲学者)

訂正不可能な信念、誤りえない信念は、知ではない。

■「私」の二つの用法

「私」という語の用法には、二つの違ったものがあり、「客観としての用法」「主観としての用法」、とでも呼べるものがある。第一の種類の場合の例としては、「私の腕は折れている」「私は6インチ伸びた」「私は額にこぶがある」「風が私の髪を吹き散らす」など。第二の種類の場合の例は、「私はこれこれを見る」「私はこれこれを聞く」「私は私の腕を上げようとする」「雨が来ると私は思う」「私は歯が痛い」など。次のように言うことで、この二つのカテゴリーの間の相違を示すこともできる。第一のカテゴリーの場合は、特定の人間の認知が入っており、したがって誤りの可能性がある、というよりむしろ、誤りの可能性が用意されていると私は言いたい。・・・それに対して、私が歯が痛いというときには人物の認知は問題にならない。「痛みを感じているのは、君だってことは確かか」と尋ねることはばかげている。なぜなら、誤りが不可能なこの場合、誤り、つまり「悪い差し手」と

あるいは考えられるかもしれない差し手は実は、もともとこのゲームの差し手などではないからだ。」(『青色本』 120)

・「私に黄色が見える」などの経験の一人称報告は、ウィトゲンシュタインのいう「私」の「主観としての用法」になる。彼によればここでは、認知は問題になっていない。つまり、これは知ではない。

(疑問) たしかに「主観としての用法」では、人物の認知は問題になっていない。「痛みを感じているのは、君だってことは確かか」とたずねることがばかげている。「私」の客観としての用法は、指示の間違ひがありえるが、主観としての用法には指示の間違ひはありえない。しかし、「君が痛みを感じているのは確かか？」と尋ねることはばかげていない。もしそういえるならば、ここでは感覚の認知が問題になっているといえるだろう。これは感覚についての知だといえるだろう。

しかし、「(他でもなく) 私は歯が痛い」というように「私」に焦点がある場合には、主観としての用法であり、「私は (他でもなく) 歯が痛い」というように「歯が痛い」焦点が有る場合には、感覚の認知が問題になっているようにおもわれる。もしこのようにいえるならば、主観としての用法でも、人物の認知が問題になっていることになりそうだ。

この議論は、次に論じたい実践的知識と関連しています。

3、実践的知識

「実践的知識」という言葉は多義的である。それは、技能知 (knowing how) の意味で使用されることもある。しかし、ここではそれとは異なる意味で、つまりアンスコム (G. E. M. Anscombe, 1919-2001) が使用した意味で用いたい。ここで「実践的知識」と呼ぶのは、アンスコムが、『インテンション』(1957、第二版 1963)の中で提案した概念である。

(参考文献 アンスコム著『インテンション』(第二版の訳) 菅豊彦訳、産業図書、1984年。

菅豊彦著『実践的知識の構造』勁草書房、1986年)

(1) 人間の振る舞い (動作、動き) の分類

アンスコムは、人間の振る舞いを次のように分類する (Anscomb, 前掲書、§ 16、菅、p.81)

1 <知らない> (板を鋸で挽いているときに、大きな音を立てて隣人に迷惑をかける)

2 <(ある記述の下において) 知っている>

2 1 <観察に基づいてはじめて知る (間違っ風邪薬を飲んでいることを)>

2 2 <観察に基づかないで知る>

221 <その動作が何故生じるか観察に基づいて知る (非自発的行為)>

(医者がひざを叩いたので、ひざが上がる。くしゃみ、あくび)

222 <その動作が何故生じるか観察に基づかないで知る (心的因果性)>

2221 <心的原因>

「窓から顔が突然ぬっと現れてびっくりして飛び上がったのだ」

2222 <動機>

a <過去指向型の動機> 復讐、感謝、後悔、哀れみ

b <動機一般> 虚栄心、愛情、好奇心など

c <未来視向型の動機 (意志) >

～するために、目的を述べる言明に見られるように未来の出来事へ言及

(2) 「意図的な行為」の定義と、「実践的知識」の定義

アンスコムが指摘したように、「何をしているの」と問われたならば、我々は即座に答えることができる。そのような行為の中には、さらに「なぜそうするのか」と問われて、即座に答えられる行為がある。この後者の行為は、通常「意図的行為」と呼ばれているものである。

アンスコムは、意図的行為を、「意図」という曖昧な概念を用いずに、定義する方法として、上のような基準を考えたのである。ところで、「何をしているの」と問われて、例えば即座に「私はコーヒーを淹れています」と答えるときのこの答えを、アンスコムは「実践的知識」と呼ぶ。彼女によれば、これらの知識は**観察によらない知識**である。そして、付け加えるならば、**推論にもよらない知識**である。

(3) 「実践的知識」は、観察にも推論にも基づかない。

「なにをしているの」と問われて「コーヒーを淹れています」と答えるとき、この答えは、経験的な知識である。それゆえに、それは感覚、推論、記憶、伝聞、それらの組み合わせによって得られるはずである。しかし、これは自分についての知識であるから、伝聞によるのではない。記憶による知識ならば、それは最初には、感覚か推論によって得られたはずである。推論による知識ならば、推論の前提は、感覚に基づく知識であることになるだろう。しかし、アンスコムによれば、この「実践的知識」は感覚（観察）に基づかないのである。

実践的知識が観察によらないということ、どのようにして証明できるだろうか。観察によるものは、感性的直観に基づく、とすることであろう。確かに、私が何をしているかを知るために、私の手足を見ることはない。仮に私が、私の手足の位置を感じているとしても、私がそれによって答えているということはない。なぜなら、私の手足の位置を感じたとしても、それだけでは私がコーヒーを淹れていることは解からないからである。では、内観についてはどうだろうか。私が、コーヒーを淹れようという意図を持っており、その意図を内観によって知り、その内観に基づいて、答えるということはないだろうか。この可能性を否定する方法はいくつかありうるだろうが、その一つを以下に示そう。

もし実践的知識が、内観に基づく知識であるとすると、実践的知識は、「私」が指示している話し手について内観に基づいておこなう**記述**であることになるだろう。したがって、もし実践的知識が、その話し手の行為についての**記述**でないのだとすれば、それが（内観を含む）観察による知識ではないことになる。

アンスコムによれば、実践的知識は、行為を記述するのではなくて、それによって行為が可能になるものであり、行為の構成的な要素の一部なのである。行為は、実践的知識なしには成立しない。通常の知識は、知識とは独立に存在している対象を記述したものである。しかし実践的知識は、知識とは独立に成立している行為を記述するのではなくて、この実践的知識によって行為が構成さ

れるものである。

この点で、「私はコーヒーを淹れています」という実践的知識の発話は、上記のウィトゲンシュタインのいう「私」の「主観としての用法」に属している。

(実践的知識には真理値がある。たとえば、「私はコーヒーを淹れています」と答えたときに、実際にはココアの粉を入れているかもしれない。しかし、このようなときにも、アンスコムはテオフラストスの言葉を引いて「間違いは行為にあつて、判断にはない」⁽¹⁰⁾と言う。)

4、人格の同一性について

(この節では、ジョン・サール『マインド』山本貴光、吉川浩満訳、朝日出版社を参照しました。

引用はそのページ数です。)

(1) 人格の同一性の基準

A、身体の時間的空間的な連続性

主張：身体を構成している細胞は80日でほぼ入れ替わってしまうとしても、身体の時間空間的な(同一性でなく)連続性が、人格の同一性を保証する。

反論1：「テセウスの船」の問題に答えをあたえられない。

反論2：ある朝突然に虫になった『変身』(カフカ)の主人公グレゴール・ザムザの人格の同一性を説明できない。

B、意識のないし記憶の連続性

主張：「時刻T2における人物P2が、それ以前の時刻T1における人物P1に起こった出来事を覚えているとき、そしてそのときに限り、時刻T2における人物P2は時刻T1における人物P1と同一である。」(p.365)

ロックは、「意識状態の継続するシーケンスこそが人格の同一性にとって本質的な要素だと考えた。」(p.361)

グレゴールサムザのように変身しても、私であるというときには、この要素が働いている。

反論1：「T2における人物P2がT1における人物P1に起こった出来事を本当に覚えているためには、単にその人がそれを覚えていると考えるのではなく、P2はP1と同一でなければならない。しかしもしそれが本当なら、私たちは同一性の主張や同一性の基準を正当化するために記憶を使うことは出来ない。なぜなら、私たちは記憶が妥当であるための必要条件として[P1とP2についてそうしたように]同一性を要請しているからだ。」(p.365)

C、結論「実際の経験の継起に加えてそれ以外の『自己』とか『人格の同一性』なるものが存在するわけではない」とロックやデカルトを批判したヒュームにたいし、現在ほとんどの哲学者が同意していると思う。」(p.367)

(2) 非ヒューム的な自己

「身体と経験の継起のほかに、さらに何かを仮定する必要があるだろうか？」この問いに、サールは、

「必要がある」と答える。

「決断したり行為を遂行したりする存在者には、ヒュームによって述べられた「知覚の束」に加えてある種の形式的な制約が課せられている、と考へなくてはならない。」(サール『マインド』山本貴光、吉川浩満訳、p.371、朝日出版社)

「自由で合理的な行為を説明するためには、ある一つの存在者Xを想定しなければならない。そのようなXには意識がある。Xは時間を通じて存続する。Xは合理性の制約のもとで行為のための理由を形成し反省する。Xは自由という前提条件のもとで決断し、行為を開始し遂行する能力をもっている。そしてXはその行為のうちの少なくともいくらかには責任を負う。」(p.371)

このようなXは、存在しないとヒュームは指摘した。たしかにXを身体や意識内容のなかに見付けることはできない。実践的知識が行為を構成するように、上述のXについての発話が、Xを構成するのではないだろうか。自己は、記述されるのではなく、行為の中で構成されるものだと言えそうである。あるいはまた、「自己」は、我々の経験の「形式」(p.373)だといえるかもしれない。

■■ 最後のメッセージ ■■

我々は、究極的に根拠付けられた知をもたない時代、別の言葉で言えば神なき時代に生きています。我々は、真理や世界や自己を構成しなければならないし、またすでに構成しています。それは、我々が生まれて育ってきた社会が、人間が作ってきたものであると同時に、我々がこれから作ってゆかなければならない社会であるとの同様です。